

平成30年度 京都産業大学法学部

# 耳野ゼミ

## 成果報告書



活動地域

いなべ市藤原町立田地区



協 力

篠立自治会、古田自治会、  
地域住民の皆様、いなべ市

## 目 次

- 1、平成30年度の活動目的
- 2、平成30年度の活動履歴
- 3、遊学祭・カルタについて
- 4、ワークショップ
- 5、立田公園遊学歩道の植物看板製作
- 6、紙芝居制作
- 7、活動まとめ



## 1、平成30年度の活動目的

今年度は主に、二つのプロジェクトを実施してきた。一つ目が、**立田公園の新しい魅力**として、**植物の看板を設置しその特色を明確化**すること。二つ目が**立田地区に残る伝統的な話を紙芝居におこし**、地域内外の人に知ってもらおうことだ。

看板設置を行った理由は、普段何気なく利用する立田公園内には多くの貴重な植物が存在しているにもかかわらず、それらの名称が表示されていなかったからである。私たちも実際に何も無い状態で公園内を散歩してみた。ところが、「あその木は～という木で…」と説明を受けても素人には見分けがつかず、「どの木ですか？」と問い返すほどだった。しかしこの公園は元々様々な植物をたくさん植樹した場ということもあり、貴重な種も少なく、是非看板を設置し、もっと多くの方に知ってもらおうと思い立った。

また、紙芝居を作成した理由は、三輪了啓様に話をうかがったところ、次のお話が返ってきたからだ。すなわち、「立田地区には江戸堤という伝統的な話がある。この話は自分たちの先祖の苦勞を伝えるものだが、だんだん知っている人が減ってきている」というものだった。私たちは、これほど大事なお話であるのなら、ぜひ老若男女関係なく知ってほしいと思い、紙芝居を作成することにした。イラストや読み原稿を考えることはとても困難だったが、少しでも地域のお役に立ちたいという気持ちをもちながら、楽しくかつ真剣に取り組んだ。

2018年度耳野ゼミ      ゼミ長 新谷 正太

## 2、平成30年度の活動履歴



2018年5月5日

### ○遊学祭参加

- ・紙芝居「明行寺に伝わる『玉眼の御木像』」を上演
- ・ゼミ生の顔写真入り名簿も配布

5月19日

### ○第1回ワークショップ

- ・地域の方と今後の活動について話し合い
- ・遊学歩道の整備の提案をしたところ好印象を得られた



5月25日

### ○紫光寮のお手伝い

- ・薪をくべるなどの作業



6月23日

### ○第2回ワークショップ

- ・前回の話し合いを踏まえ活動内容を絞った



9月22日

### ○看板製作に関する調査

- ・立田公園にて植物の種類や看板を立てるコースの調査

10月19日

### ○看板製作に関する調査

- ・専門家の教えを受けながらどの植物に看板を設置するかを決定



11月5日

### ○紙芝居の原案選定のための調査

2019年2月20日

### ○看板設置作業

- ・地域の方々とともに植物の看板を立田公園内に設置



### 3、遊学祭、カルタについて

#### 1 遊学祭

立田地区で毎年5月上旬に行われている行事に、耳野ゼミとして紙芝居「明行寺に伝わる『玉眼の御木像』」を上演した。

紙芝居は二学年前の耳野ゼミ生が制作したもの。

立田地区は教育熱心な土地柄であり、これまで土地の歴史を地域の子どもの伝えることに注力してきた。そのため地域の話をも紙芝居にすることで、地域の歴史、魅力を伝えることが期待され、耳野ゼミが紙芝居を制作。また、これを受けて、二年前の遊学祭から学生が読み聞かせを行っている。



#### 2 カルタ

二学年前(平成28年度)の耳野ゼミ生が立田地区のことを題材にした紙芝居を作成し、遊学祭で紙芝居を読み聞かせるイベントを行った。私たちは先輩方が作った紙芝居を読むだけの現状に満足できず、子どもたちに立田地区の歴史を楽しく知ってもらうために、私たちで地域に題材をとったカルタを作ろうと考えた。カルタ作りでは、学生が5・7・5調で読み札を作り、地区の方にも好評だった。しかし、最終的にはカルタの制作は難しく、地区の要望と合わなかったため断念した。以下は学生が作った読み札の一例である。

明行寺生まれの  
玉眼の御木像

風穴を歩けば  
聞こえる  
水の音



## 4、ワークショップ

### 1 全体の概要：ワークショップの目的

ワークショップの目的は、平成30年度の活動についての内容を協議し、地域の方々との交流を深めることである。初めに、学生が大学で考えた活動案についてプレゼンテーションを行い、その後、各テーブルにて学生が地域の方々とプレゼンテーションの内容について議論した。合計2回のワークショップを実施した。

### 2 【第1回ワークショップ】 5月19日 参加者 30名

学生から、まちかど博物館の移転・展示、遊学歩道の整備、物づくり、料理のイベントなどを提案した。以下は、ワークショップで出た意見の一例である。

#### ○まちかど博物館の移転・展示

学校を使用できる可能性はあり、学生がレイアウトを考えると面白いが、所有者に移転・展示の許可が貰えるかわからない。

#### ○遊学歩道の整備

遊学歩道の整備は一気にすべてやるのは困難なので、一部から少しずつ何年かにわけて整備を行い、整備できた遊学歩道を使用して、ウォーキングイベントなどを開催できれば、面白い。

#### ○物づくり

カルタ作りは実現しやすそう。地域の所々に俳句が書いているカルタの看板を立てたら良いと思う。

#### ○料理作り

自分たちで料理を作るのであれば、保健所の許可があるので厳しい。

### 3 【第2回ワークショップ】 6月23日 参加者 18名

第1回での話し合いを踏まえ、新たな提案を行った。提案した内容は、まちかど博物館の移転・展示、遊学歩道の整備、かるた作りである。

#### ○まちかど博物館の移転・展示

移転するための許可は取れていて、破損の責任は問われない。しかし今後の計画が地区内で具体的に決められておらず、すぐに移転に取りかかるのは難しいという結論に至った。

#### ○遊学歩道の整備

地域の方からは、遊学歩道のカラー表示や、遊学歩道の道筋や役割の明確化などの意見が出された。その結果、遊学歩道の整備のみを実行するという案が採用されそうであった。しかし、遊学歩道には貴重な植物がなっており、それらの種類などが明確化されていないという問題が新たに提起された。そこで、今年度は遊学歩道の植物看板の設置を中心に検討することになった。

#### ○カルタ

文字札を考えることはできるが、絵を描くことが困難であるという見解に至った。また、制作後の使い道について、今すぐに協議できなかったためカルタの制作は見送られた。

### 4 結論

今回、二回にわたり地域の皆さんとワークショップを行ったことで、私たちに可能な活動内容が明確化できた。また、地域の皆さんと親しく意見交換できたことも、とてもよい経験になった。

話し合いの結果が、植物看板の設置に繋がり、ささやかではあるが遊学歩道の改善に貢献できたのではないと思う。

## 5、立田公園遊学歩道の植物看板製作

### 1 活動を実施するに至った経緯

私たちが立田公園に看板を設置することになった理由は、まず学生が立田公園にはたくさんの魅力があると感じたからだ。立田公園は白石工業が地区で操業していた時代に造られたものであり、非常に歴史のある公園である。また、立田公園は自然が豊かで、緑に恵まれており、たくさんの種類の植物が生育している。そこで私たちは、この豊かな自然を生かすために、遊学歩道を整備してなにかイベントを実施し、盛り上げたいと考えた。

そのために、実際にワークショップで地区の方々との話し合いの場を設けていただいた。ここでは、遊学歩道の整備に関しては、地区ではなかなかできないため、学生が主となって行うのは良いのではないかという意見が出た。しかし、実際には整備するのは学生だけでは厳しいという結論に至った。その後、地区から、立田公園を通っている遊学歩道にある植物に看板を設置してはどうかという提案をいただいた。この案は、立田地区の魅力を伝えたいというゼミ生の意見とも一致したため、私たちは看板設置に取り組むことになった。

### 2 内容

活動として、まず私たちは一回目のフィールドワークで看板を設置する遊学歩道の下見を行った。そこでは、学生と市役所の方でどのような植物があるのかを確認した。二回目のフィールドワークでは、植物の専門家の方々に同伴していただき、きれいな植物や、珍しい植物を教えて頂いた。専門家の方々は、私たち学生にとっても親切に対応してくださり、植物に関する知識を惜しみなく提供してくださった。私たちは、そこで聞いた植物を記録しておき、それを大学へ持ち帰り、ゼミの時間で作業方針を話し合った。その結果、13種類の植物に看板を設置することになった。そのうえで、13種類の植物の看板に入れる説明文をゼミ生で分担し、各自でインターネット、書籍などを利用してまとめた。各看板の文章について何度か授業で話し合いを重ね、修正すべき点や、改善案などを出し、徐々に完成させていった。最終的には、完成した文章を、専門家の方に確認して頂き、間違っている情報や、載せた方が良い情報を教えて頂き、さらに修正を加えてゼミ生も納得のいく仕上がりのもになった。

また、今回は実現しなかったが、看板の一つのデザインとして、植物の名前の由来となっている動物などの絵を看板に入れるという案も上がっていた。

### 3 実際の看板設置作業



左の写真は実際に設置したイチョウの看板である。

看板には植物の名前、植物の分類、葉の性質(落葉樹・常緑樹)、そして特徴や名前の由来、開花時期、花の色などを記載した。看板のサイズは縦 15cm/横 20cm。

看板を設置する作業は2019年2月20日に実施した。作業当日は、専門的な技術が必要であり、学生だけでは設置が困難であったため、業者の方に協力していただいた。看板は13種類の植物に14枚を設置した。(イチョウのみ二枚)

設置する際には、どの高さに取り付けることでより見やすくなるのかを相談しながら作業を行った。看板は非常に頑丈な素材であるため、雨風にも強い。また、私たちゼミ生にとって、実際に植物に設置することは、これまでの看板の文案、デザインを考える作業とは違い、初めての作業であったため不安があったが、業者の方が丁寧に取り付け方を教えてくださり、無事設置を終えることができた。

看板を製作するにあたり、私たちゼミ生が最も心がけたのは、立田公園を訪れた人がもう一度来たいと思っていただけるような看板を作ることだ。それぞれの植物の開花時期や、花の色を入れることで、次は花が咲いたときに見に来ようという人が少しでも増えれば、立田地区の魅力を伝えることに繋がるのではないかと思う。

#### 看板を設置した植物一覧 計13種類

オオモミジ・アカシデ・クスノキ・イチョウ・アカガシ・ヒイラギ・ヤブツバキ・  
ゴンズイ・クロモジ・ガマズミ・コナラ・サルスベリ・モチノキ



## 4 今後の遊学歩道の利用について

今回、私たちが立田公園の一部の植物に看板を設置したことで、今後、遊学歩道を訪れた方々が立田地区に魅力を感じて頂けたら良いと思う。立田地区に住んでいる方は、看板を見ることで改めて立田地区にある植物や、自然の素晴らしさに気づき、子どもたちは、知らなかった植物などを詳しく知ること、自然をより好きになって頂ければと思う。また、観光で来られた方も看板に目を止めて、立田地区に関心を持ってもらえたら幸いだ。

今後の遊学歩道の利用については、今回は看板を設置させていただいたので、次は遊学歩道そのものを整備できたらよりいっそう地区が活性化するのではないかと思う。遊学歩道を歩いてみると、所々道のわかりにくい場所があるので、そこに案内の看板を立てることで、初めて遊学歩道を歩く人でも迷うことなく目的地に着くことができるだろう。

またそのようにいっそうの整備ができれば、今年度の活動では実現しなかったが、整備した範囲での遊学歩道を利用したイベントを開いて活動すれば人が集まり、楽しめるのではないだろうか。

## 5 植物看板設置の振り返り

立田地区にある豊かな自然を生かせるプロジェクトとして、今年度は遊学歩道に並んでいる植物の看板を設置させていただいた。昨年度から遊学歩道に関する活動ができれば良いと思っていたので今回の活動ができて本当にうれしく思う。遊学歩道は歴史が古く、毎年多くの方々が利用されているので、少しでも足をとめて看板を見て、植物はもちろん、立田地区に関心を持ってもらうということをテーマに掲げ、作業を進めていった。また、私たちが専門家の方々と調査で実際に聞いたこと、見たこと、感じたことを大学生ならではの目線で伝えることのできる看板にしようと考えた。看板を一から制作するのは、耳野ゼミとして初の試みであり不安もあったが、市役所、藤原岳自然科学館、そして地区の方々のご協力をいただけたおかげで非常に良い看板が出来た。今後、設置した看板が立田地区の発展に貢献できれば幸いだ。

看板設置班 代表 岸田 一也



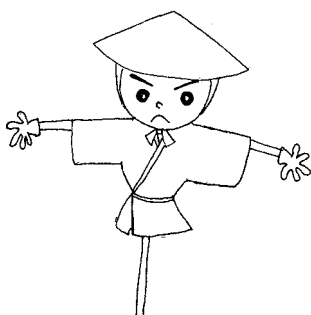


## 6、紙芝居制作

### 1 江戸堤とは



現在の江戸堤



今から約260年前、篠立の人たちは、元観音の下一帯の仏の尾を通る川の水のおかげで生きていた。しかし、いったん雨が降ると、土石流が起き、篠立の家も田畑も、土や砂や石で村を荒らし続けて困っていた。そこで、堤を作り川の流れを変えることで被害を抑えようとした。しかしその頃は、江戸幕府の目が光っている時代だったので、勝手に土を動かして堤を動かすことは出来なかった。村の庄屋六兵衛を中心に寄合をした結果、江戸幕府に許しを請いに行く三人が決まった。三人は難儀な道を乗り越え江戸に着き書面を幕府に出した。幕府の許しがでて、篠立に戻り工事に着工した。村人が手作業で働き、六兵衛の思い通り水は篠立を避け三谷川へ落ちていくようになった。江戸堤ができあがり、田畑も安心して作ることができ、村人はとても喜んだ。今地区に住む人たちがこの地区に居られるのは、苦勞をいとわず江戸堤を作り、今の篠立を残してくれた先人たちのおかげである。

転載：三輪タマオ作・紙芝居『江戸堤』より

### 2 先行作品が作られた理由

この江戸堤の話は、すでに地域の方によって一度、紙芝居が作られている。立田地区の三輪タマオ様が2011年10月に作られた作品がそれだ。この作品は、今の篠立があるのは江戸堤を作ってくれた先人のお陰であるとして、先人の思いと苦勞を後世に伝え、感謝の気持ちとともに地域がいつまでも栄えることを願って作られたものである。



### 3 リメイクする理由



この江戸堤の話は紙芝居になる以前から地域に伝わる、昔から地域に住んでいる方々にとっては、一度は聞いたことのある話だった。これからの地域を担う子どもたちには、地域のことに関心を持ってもらいたいと私たち学生は考えた。そこで、まずは先行作品を参考にして、地域目線で詳細に書かれていたお話の要点をまとめ、絵や話の内容を理解しやすくすることを試みた。それは、地域の外部者である大学生の感性を活かしてリメイクすることで、子どもたちをはじめとする、幅広い世代の方々に興味を持っていただけるようにしたかったからだ。また、紙芝居が完成した暁には、学生や地域の方による読み聞かせの機会を設けることで、後世にこの大事な話を伝えていけると考えたためである。

### 4 作成にあたっての工夫

まず、元々あった先行作品が比較的話が長く、語調が今の若者には理解が難しいように感じた。そのため、作品の重要な場面を残しつつ、自分たちで新たに、ストーリーや絵のリメイクを行った。その際、子どもでも理解しやすいように文章は短くし、場面を多く作ることをこころがけた。紙芝居の絵も、子ども向けで明るく、また親しみやすく、内容をより理解できるように工夫したので、見る人の気持ちを動かすことができるものになったと思う。先行作品の絵を尊重しつつも手を加え、さらには学生たちで作ったストーリー部分には作画班のオリジナルの絵を追加した。紙芝居の舞台となった時代にあった服や生活用品を調べ、リアリティに配慮することによって、その時代の雰囲気再現することに一番気を使って作成した。



## 5 関係者からのフィードバック

○いなべ市 企画部 政策課 桑嶋 幹人 様

江戸堤は、地域の人たちにとって自分たちのルーツにもつながる、いわばスピリチュアルなスポットであり、物語でもある。分水嶺という地理的条件から水が流れ出してしまうため農耕が十分にできず、また土砂災害まであった大昔、それでも立田の人は、この不利な条件の村を捨てず、愛し続け、住み続けた。そこには、現代の我々とは次元の違う村への強い愛着や、遙か子孫への思いやりがあったのだと想像する。

そんな地区の人にとってかけがえのない江戸堤について、学生の皆さんは、よく取材し、また想像を張り巡らして、分かりやすい解釈まで落とし込んでくださったように思う。また、絵もとてもかわいらしく、愛着がわく。市の事業として、まだ手付かずだった立田の歴史分野に切り込んでいただいた功績に対し、感謝を申し上げたい。

どうか、皆さんの故郷にも、きっと江戸堤のようなスピリチュアルな場所があると思うので、この機会に愛郷心を養っていただきたい。

## 6 紙芝居制作に携わって

紙芝居の制作にあたり最も大切にすることは、かつて篠立の人々が大変な苦勞をされた事実を、現代の人々に伝わる内容にすることだ。このことをふまえ、大学生なりに面白く、真面目に、また立田地区の皆さんに楽しんでもらえるようにと、アレンジする事に紙芝居班一同尽力した。既存の紙芝居のリメイク



という事で、先行作品にあまり囚われず、別の作品のようにする事は大変な苦勞を伴った。内容を少し分かりやすくし、先行作品にはない、思い切った戦闘シーンを入れてみるなど子どもから大人まで楽しめる紙芝居になったと思う。紙芝居を通して、立田地区の子どもたちや市外の人たちに、立田の魅力を知って頂く、また知るきっかけにして頂ければと思う。

今回、絵とストーリーについて一通りの成果を得たので、機会があれば、地域の方の意見をうかがってさらに完成度を高めたい。

紙芝居班 代表 高士 惣平



## 7、活動まとめ

担当教員 耳野 健二

全体統括 新谷 正太



植物看板製作班

【3年次】 班長 岸 田 一 也  
 宮 崎 優 空  
 松 本 聖 也  
 山 本 崎 人  
 岩 崎 文 哉  
 大 西 達 貴  
 小 川 真 央  
 木 本 侑 希  
 駒 井 元 気  
 長 岡 天 志



紙芝居制作班

【3年次】 班長 高 士 惣 平  
 入 場 朋 香  
 高 守 村 希 弥  
 岡 折 屋 大 拓 輝  
 折 黒 本 拓 哉  
 黒 原 山 侑 紀  
 松 山 岡 菜 乃  
 長 岡 尾 陽 航 平  
 南 川 中 桃 樹 菜  
 島 前 橋 真 奈 美  
 ひな



平成30年度も、京都産業大学の学生たちが地域でお世話になりました。今年度は、二回のワークショップで地域の皆様と交流の機会を持ったうえで、立田公園の整備のお手伝いや地域に伝わるお話の紙芝居作成に取り組みました。地域の皆様には、いつも学生たちを温かく迎えていただくとともに、お忙しい中懇切なご指導とご協力を賜り、心から御礼申し上げます。

京都産業大学は2014年にいなべ市と連携協力に関する包括協定を締結しました。これは、大学と市が地域活性化と人材育成について互いに協力しながら、両者の良い関係を築くことを目的にしたものです。以来、この協力関係の一環として、毎年学生たちが立田地区でお世話になってきました。今年で学生の活動は、五年目になります。

今年度も学生たちは、地域に何度も足を運び、自分の目で見、自分の頭で考え、地域の皆様のお役に立てることを探し、それを実現するため努力いたしました。とはいえ、まだまだ至らぬ点、力及ばぬ点多々あり、地域の皆様からみれば改善の余地は幾つもあるかと思えます。引き続き、厳しいご叱正とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

京都産業大学 耳野 健二